

「哲学の課題」

(愛知学芸大学岡崎分校学生新聞創刊号)

一九五〇年一月一七日

哲学の課題 (一)

上山春平

普通の人はその時代その社会の尺度に従って物事を判断したり評価したり、その尺度はもとより相対的なものであつて無限の可能性をばらむ人間の生活の一面を律するものでしかあり得ない、哲学や宗教の分野に大きな足跡を残している天才達はこのような尺度を越えた、むしろそれを包むようなもつとも立体的な尺度を見出そうとしてきた、普通の尺度ではマイナスのみ現れる人がこの尺度においては新しいプラスを読み取る事が出来る

イエスの有名な「山上の垂訓」は「幸福なるかな心の貧しき者、天国はその人のものなり」という言葉で始められているがこゝでは価値の尺度が全くぎやくになつて「善人なおもて往生す、況んや悪人をや」という親らんの言葉もこの点では軌を一にしているものといえよう

社会の標準、法律や道德等は人間的生活に影と日向を造りある時代のある社会的標準が偶然ある人の生活にとつて有利であればその人は幸福であるがそうでない場合には人は不幸に陥りやすい、現在の社会の物指で満足している人は他の物指を欲しがりはしないし況んや他の物指を使おう等とはしないがそれによつてマイナスの結果ばかりの出る人や制限された一面的な社会的標準にはいづれも満足し得ない人はこの物指を喜んで捨て去るだろう

イエスは金持が天国に入るのはラクダが針の穴を通るのより難しいといつたといわれているがお金だけではなく現存する尺度でプラスと出てくるものなら世間の良い評判であるうと何でも新しい尺度を採用する氣持を妨げる、マルクスがプロレタリアートを革命の推進力になぞらえたのも彼等において現在の社会的尺度ではマイナスのみが現われマルキシズムの尺度ではプラスばかりが現れるからに外ならない、それ故にまたイエスが学者やパリスイ人を痛撃したように彼は現社会の支配者達のおこぼれを頂戴しようというプチ・ブル根性に対して徹底的批判を加えたのである

わたくしがマルクスとイエスとを交互に引合いに出したのはマルキシズムがキリスト教と似ていないばかりでなくむしろその反対物ですらあるといわれているにも拘らず両者は新しい価値の尺度を持ち行動の原理をもつ点とともに信仰の型態として把え得るように思われるからである

宗教と信仰とは同じ意味に用いられる事も多いが、例えば英語の場合では Faith や Belief の方が Religion より遙かに廣い巾を持つものである事は誰しも疑うまい、人間が意識的

な行動を特徴とする動物である限り全てを本能にまかせる事もまた全てを不完全な知性にまかせざる事も出来ないで本能と知性のまちなちな均衡において行動を続けねばならない、それ故に両方の要求を相互に満たすような行動原理が必要である、このような原理を信仰というのが嫌なら確信といつても人生観といつても差仕えなからう、現代人は暗い本能(新聞・雑誌・映画等のいずれをとり上げてみてもその実例には事欠かない)と輝く知性(近代科学の諸成果をみよ)との新しい均衡の場を求めている、旧來の信仰を失つてバラバラに分解された人間分子は(この事態をニーチェは「神は死んだ」という言葉で表わしている)今や新しい結晶軸を求めている、マルキシズムがそのような要求に対して注目すべき内容を用意している事はその事実を快く思うと否とに拘らず認めない訳には行かないであろうが、われわれはこれと並んでプラグマティズムや実存主義がそれぞれ独自の提案を行っている事を無視する事は出来ない、來るべき時代は一体いかなる行動原理を選ぶべきか、否自分は一体如何なる行動原理を選ぶべきか、これこそ眞の哲学的課題だとわたくしは思う。

愛知学芸大学岡崎分校新聞創刊号

一九五〇年一月一七日

「哲学の課題」(二)

a. 問題意識

(一九五〇)十一月下旬発行の讀賣新聞に日本哲学会秋季大会(第二回大会)の印象記がのせられていた。筆者はヘーゲル哲学研究で有名な武市健人教授である。教授は大会の印象を「問題意識の欠除」という一語で以て性格づけ、その低調ぶりをなじりつつ次のように述べている。「無論いろいろのことやら文献とかにはみな相当に通じている。しかしそれは長い問學問をやっておれば誰でもそうなることで、当然のことである。だがその場合その自分が問題にしていることが哲学史上どうゆう問題性をもつかとゆうこと、従つてそれがやがてどうゆう現実的な問題に連つていものかとゆう点に対する自覚が一体あるかどうか。」と。

私はこの意見に全く同感である。二番煎じ三番煎じの学説いじりが學問の進歩に何等貢獻しないことはもとよりのこと、そんな所で足踏みしている哲学者などこの危機に瀕している日本にとつては全く無用の長物とゆうより外はない。ここ数十年來日本の哲学界はドイツ観念論とゆう重い食事をこなし切れないで悪夢にうなされつづけている。さすがに眼先の速いジャーナリズムはそんなものをさつさと取残してマルキシズムや実存主義などとゆう新しい話題をもつばら取扱つているが、さて開き直つて学会となるとこんな借着では間に合はなくなるのか、依然として独逸観念論にまつわる悪夢がチョウリョウする仕末である。

大会第二日、京大出身の優秀なヘーゲリアンの一人が自信満々たる論陣を展開した後、突然粗野な老学者が立ち上つて、「君達はヘーゲルがどういつたとかカントがどういつたとかいつて何時までそんな寝言をくりかえすつもりなのか。そんなことに満足しているからいつまでたつても日本の哲学会は一步も前進できないのではないか。」とどなりつけた。一同あつけにとられているうちになおもするどい論難がつづけられたが、とうとう司会者の再三の制止によつて沈黙させられた。その時は田舎学者何を云うかといわんばかりに皆げらげら笑い飛ばしていたが、後できく所によるとかの老学者は国際学会にも出席したことのあるベテランだとのことであつた。この一事をもつてしても吾が哲学会の病まさに膏肓に入れりの感なきを得ない。

「問題意識がない」ということは、現実の生きた問題と取組んでいないとゆうことであり、過去の学説の亡霊とのみ遊びたわむれているとゆうことである。哲学がこのように生きた問題との対決を避けたり引延しているかぎり、自己の生命を失つて無用の長物に成り下ることは云うまでもない。有名な「山上の垂訓」の中に、「汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。」とゆう言葉があるが、現実との交渉を失つた哲学はあたかも塩気を失つた塩の如く、また信仰を失つたキリスト教徒の如きものといえよう。「来るべき時代は一体いかなる行動原理を選ぶべきか、否自分は一体如何なる行動原理を選ぶべきか。」とゆう問が、哲学の中心的課題として要請される所以である。そしてこの問は、恐らくもつとも旧くして常に新しい「真理とは何か」という問にたつらなるものである。

真理とは何か 一九五〇

「なんぢはユダヤ人の王なるか」というピラトの問に対して、「なんぢの言ふが如し」と云い放つたまゝイエスは沈黙を守つた。「ピラトの怪しむばかりにイエス更に何を答へ給わず」とマルコは記している。

ヨハネ伝では同じピラトの問に対して、「われは王たることは汝の言えるがごとし。我は之がために生れ、之がために世に来れり、即ち真理につきて証せんためなり。凡て真理に属するものは我が声をきく。」とイエスは語っているが、「真理とは何か」というピラトの反問には答へていない。

総督ピラトは恐らく当時のローマのインテリゲンチヤとしてヘレニズム哲学の断片を身につけていたであろうし並いる祭司長らは動脈硬化に陥りかゝつたユダヤ教の教義で武装されていたであろう。そしてイエスの真理観が祭司長らのそれとは全く相容れずまたこのローマ帝国官僚の常識と眞向から対立するものであつたことは明白である。つい眼と鼻の所に立つているイエスとかれらとの間には底知れぬ深淵が口を開き、無限の距離が介在していたのである。

「真理とは何か」というピラトの問は、イエスの口から直接には答を得ることができなかったが、彼の使徒や信者達によつて力強く答えられた。原始キリスト教徒達は「神によ

りて眞をおこなう者」という強い自覚のもとにローマ皇帝の不断の抑圧と十数回にわたる大虐殺に耐えぬいて遂に皇帝を屈服せしめ、イエスの福音が中世一〇〇〇年にわたつて公認の眞理とされる基礎をきづいた。

しかし乍ら、中世の末期から近世の初頭にかけて再びピラトの間がくり返されたのを吾々は知っている。それはあの時ほど弱々しい声ではなくだんだん明瞭にそして力強くなつてゆく若々しい声であつた。ピラトはよみがへつたのである。ルネサンスに至つて頂点に達したその声は遂に自らの答を語り始めた。ガリレイ・ベーコン・デカルト・ニュートンと次々に代弁者を取代えながらそれは全地球をおおうに至つた。もとより新しい眞理は決してたやすく古い眞理にうちかつた訳ではなく、イエスが十字架にかけられたようにブルノーは焚刑に處せられガリレオは宗教裁判にかけられた。それは長い年月にわたるキリスト教との闘争の後十八世紀の啓蒙思潮や産業革命などを経て十九世紀に至つてようやくゆるがし得ないものとなつた。

哲學の課題 (3)

哲學教室 上山春平

しかし乍ら十九世紀の後半期に入つて吾々は又々いぶかし気に「眞理とは何か」とつぶやく声をきく、それはキエルケゴールやニーチエに至つて確固たる響きをおびてきた。吾々は彼等において代表的に見られる近代的 세계観への否定的たい度を実存主義という名によつて呼びならわしているが、この名称はヤスパースやハイデッガーによつて思想界の商標となり第二次大戦後サルトルやマルセル等によつて一層普及されている。その源流をニーチエとキエルケゴールにまでたどれば、キエルケゴールと同時代のドストエーフスキイやニーチエの先行者としてのショーペンハウエルなどもこの思想圏内に入つてくるであろう。そしてキエルケゴールとドストエーフスキイが夫々新教とロシアを正教につながりをもつており、ニーチエはショーペンハウエルを通じて佛教につながりをもっていること(ショーペンハウエルの主著の思想がいちぢるしく原始佛教の影響をうけていることは周知の通りである)が注目される。即ち、この思想の源泉は宗教的世界観のうちに見出されるように思われるのであるもとよりこのことは実存主義が直ちに既成宗教と手をつなぐことを意味しはしない、そこにはあたかもイエスとユダヤ教、ルターとカトリック教、釈迦とバラモン教との間に見られたような激しい闘争が予想されさえする。宗教的世界観はこのような激しい自己否定によつてのみその老衰した救済機能を更新することができるものゝようである。実存主義は既成宗教と衝突するのみではなく、近代的 세계観のいわば極限的代表といはうるマルキシズムや、更にまたプラグマティズムとも激しく衝突する丁度兵士が自己の生命本能にうちかつて敵中に突進して行くときのように、それが敵に対して強くあるためには先づ自己にうちかたねばならない。宗教的世界観の自己超克が徹底していなければ

ば近代的 세계觀との闘争には敗れる外はない。それ故に外敵との闘争はいよいよ自己否定を徹底せしめずにはおかないだろう。今日吾々はこのような真理の闘争の渦中に立たされている。「真理とは何か」という問はますます高らかとなり、それへの答はますます紛糾に陥つてゆく。しかも哲学はこの問を回避することはできない。それは哲学の自殺にも等しい行為だからである。

Kyoto University